

水稲新品種「いでゆもち」の主要特性

春原 嘉弘・横山 裕正・川村 陽一・須藤 充・前田 一春

(青森県農業試験場藤坂支場)

Characteristics of a Newly Released Rice Variety "Ideyumochi"

Yoshihiro SUNOHARA, Hiromasa YOKOYAMA, Yoichi KAWAMURA, Mitsuru SUTO and Kazuharu MAEDA
(Fujisaka Branch, Aomori Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

大分県九重町飯田地区の標高800m以上で奨励されている「わせとらもち」は出穂・成熟期、収量性等の栽培特性は比較的良いものの、餅質に難点があり、小粒で玄米品質の年次変動も大きい。このため、「わせとらもち」より早熟で、玄米品質、餅質の良い品種が要望されていた。「いでゆもち」(旧系統名: ふ系籾156号)は1982年青森県農業試験場藤坂支場において早生・多収の糯品種の育成を目標に、「藤もち773 (オトメモチ/藤329)」を母とし、「わせとらもち」を父として人工交配した雑種後代から選抜された品種で、1996年から大分県で奨励品種に採用されることになった。本報では、品種育成の過程で明らかになった「いでゆもち」の主要特性について述べる。

2 形態的特性

移植時の苗丈は「わせとらもち」よりやや長めで、葉色は「わせとらもち」並の“やや濃”であり、本田の初期生育は「わせとらもち」並である。表1に示すように、稈長

は「わせとらもち」よりやや短く、「アネコモチ」並かやや長い。稈長は「わせとらもち」よりやや長く、「アネコモチ」並である。穂数は「わせとらもち」並かやや少なく、「アネコモチ」より多い。稈は「わせとらもち」並の“やや太”、“やや剛”で、耐倒伏性は「わせとらもち」並で、「アネコモチ」より弱い“やや強”である。粒着密度は「わせとらもち」より疎の“やや密”で、ふ先色は“褐”で、短芒を“稀”程度生じる。出穂期頃の葉色は「わせとらもち」並の“やや濃”で、止葉はやや直立し、穂揃いは良好である。

3 生態的特性

出穂期、成熟期は、育成地で「わせとらもち」並で、「アネコモチ」より1日程度遅い“早生”に属する(表1)。採用県では、「わせとらもち」より出穂期で2日、成熟期で4日早い。耐冷性は「わせとらもち」より強く“中”である(表2)。いもち病の真性抵抗性遺伝子型は“+”と推定され、圃場抵抗性は葉いもちが“やや強”、穂いもちが“中”である(表3、表4)。白葉枯病抵抗性は「わせ

表1 生産力検定試験結果

品 種 名	施 肥	出穂期	成熟期	倒伏程度	稈長	穂長	穂数	全重	玄米重	収量	玄 米 品 質
		(月.日)	(月.日)	(1-5)	(cm)	(cm)	(本/㎡)	(kg/a)	(kg/a)	(%)	千粒重 (g)
いでゆもち	標肥	8. 9	9.15	0.2	75	17.6	449	145.5	53.6	111	22.9 6.0
	多肥	8. 9	9.18	0.8	79	18.0	501	156.6	55.8	111	22.1 6.3
わせとらもち	標肥	8. 9	9.15	0.1	78	16.7	467	144.1	48.2	100	20.6 6.7
	多肥	8.10	9.21	0.6	81	17.0	512	151.8	50.3	100	20.1 7.0
アネコモチ	標肥	8. 8	9.15	0.0	73	17.3	406	150.9	53.0	110	20.9 4.6
	多肥	8. 8	9.17	0.0	75	17.9	441	160.5	54.2	108	20.5 5.0

注. 育成地の1988年~1991年, 1995年の5年間の平均値である。

表2 障害型耐冷性検定結果

品 種 名	出穂期 (月.日)	不稔歩合 (%)	判 定
いでゆもち	8.13	64.7	中
中母35	8.12	28.6	極 強
アネコモチ	8.12	36.7	強
ハヤニシキ	8.12	68.8	やや弱

注. 水温を約19.5℃, 水深25~30cmとし, 約40日間処理した。成績は育成地における1988年, 1990年, 1992年, 1994年の4年間の平均値で示した。

表3 葉いもち抵抗性検定結果

品 種 名	推定遺伝子型	発病程度	判 定
いでゆもち	+	4.9	やや強
レイメイ	<i>Pi-a</i>	5.0	やや強
アキヒカリ	<i>Pi-a</i>	5.0	やや強
ムツホナミ	<i>Pi-a</i>	5.6	中
トワダ	<i>Pi-a</i>	5.7	中
陸奥光	+	7.3	弱

注. 育成地の畑晩播による。1987~1990年, 1993~1995年の7年間の平均値で示した。

表4 穂いもち抵抗性検定結果

品種名	推定 遺伝 子型	出穂期	発病 程度	判 定
いでゆもち	+	8.12	5.4	中
フジミノリ	Pi-a	8.14	4.2	強
レイメイ	Pi-a	8.15	4.6	やや強
トワダ	Pi-a	8.14	6.2	やや弱
コチミノリ	+	8.10	6.4	やや弱
ふ系94号	Pi-a	8.16	7.1	弱

注. 育成地における1989年, 1994~1995年の3年間の平均値で示した。

表5 穂発芽性検定結果

品種名	発芽程度	判 定
いでゆもち	6.9	易
わせとらもち	7.1	易
アネコモチ	6.3	やや易
タツミモチ	4.5	中
サカキモチ	2.6	やや難

注. 育成地における1988~1991年の4年間の平均値で示した。

表6 玄米の粒長, 粒幅及び粒厚

系統名 及び 品種名	粒長 (mm)	粒幅 (mm)	粒長 / 粒幅	粒長 × 粒幅	粒 厚 比 率 (重量比%)					
					2.4mm以上	2.3mm	2.2mm	2.1mm	2.0mm	1.9mm
いでゆもち	4.67	2.94	1.59	13.7	1.8	23.9	41.7	27.0	3.9	1.6
わせとらもち	4.83	2.88	1.68	13.9	0.2	2.9	19.2	59.2	14.2	4.2
アネコモチ	5.02	2.91	1.72	14.6	-	0.7	6.0	51.6	31.9	9.7

注. ____ はモードを示す。1995年の育成地における生産力検定試験・標肥区の内容を用いた。

表7 食味官能試験結果

品種名	生産地	総 合	外 観	味	こしの強さ	硬 さ	基準品種	試験回数	パネル数
いでゆもち	藤坂	0.63	0.09	0.20	0.62	-0.25	わせとらもち	3	15~19
アネコモチ		0.04	-0.04	0.07	0.08	0.22			
いでゆもち	藤坂	0.49	0.11	0.22	0.29	-0.34	サカキモチ	2	12~14
いでゆもち	大分	0.53	-0.15	0.19	0.46	-0.27	わせとらもち	2	13~14

注. 1988~1990年, 1995年に育成地で実施した試験の平均値で示した。

評価基準は-3 (悪い, こしが弱い, 軟らかい) ~ 0 (同じ) ~ +3 (良い, こしが強い, 硬い) で示した。

とらもち」より弱く, “やや弱”である。穂発芽性は「わせとらもち」並の“易”である(表5)。育成地における玄米収量は「わせとらもち」よりまさり, 「アネコモチ」並である。

4 品質・食味特性

玄米の形状は「わせとらもち」並の“やや円”, 玄米の大小は「わせとらもち」並の“やや小”であるが, 粒厚が厚く(表6), 千粒重は「わせとらもち」, 「アネコモチ」より重い。玄米品質は「わせとらもち」にまさるが, 「アネコモチ」より劣る“上下”である(表1)。搗精に要する時間は「わせとらもち」並で, 搗精歩留り及び精米の白度は「わせとらもち」並である。餅の食味はこしが強く良好であり, 「わせとらもち」よりまさる“上下”である

(表7)。餅の硬化性は「わせとらもち」, 「アネコモチ」より大きい。

5 栽培上の留意点

「いでゆもち」の栽培に当たっては, 耐倒伏性は“やや強”であるが, 品質・食味の低下を防ぐためにも多肥栽培は避ける。穂発芽性が“易”であることから適期刈り取りにより品質の低下を防ぐ。いもち病菌抵抗性は葉いもちが“やや強”, 穂いもちが“中”と十分ではないことから基本防除を励行する。耐冷性は“中”と, 十分ではないので, 低温時には深水灌漑を行って幼穂を保護する。白葉枯病に弱いので常発地帯での作付は避ける。